

# ケネディ政権とボリビア MNR 革命政権：進歩のための同盟の「モデル」としてのボリビア, 1961-63年（中）

上 村 直 樹

1. はじめに
2. アイゼンハワー政権からケネディ政権へ：キューバ革命と対ソ接近の衝撃
3. パス政権の登場
4. 近代化論・「進歩のための同盟」

（以上、『アカデミア』（社会科学編）第11号（2016年））

## 5. ケネディ政権の登場とボリビア革命

ケネディ政権は、発足直後からキューバ革命を強く意識して第三世界への援助政策の全般的な見直しとラテンアメリカに対する「進歩のための同盟」政策の策定作業を進めるが、その一環として対ボリビア援助政策の見直しにも着手する。ケネディ大統領は、上院議員時代から米ソ冷戦の観点から途上国への開発援助に強い関心を抱いており、第三世界における「平和的」・「民主的」な「革命」に対する支援の必要性について語っていた。既に1954年のベトナムに関する演説において、ケネディは、「共産側が提供するいかなるものよりはるかに優れた政治的・経済的・社会的革命、平和的かつ民主的で受け入れ側が一層の主体性を持つ革命」をもたらすような援助計画を構想する必要があると述べていた。こうした考えは、キューバ革命以降、ラテンアメリカにも適用されて「進歩のための同盟」に直接結びついていくが、ケネディは、特に1960年の大統領選挙への出馬に向けて、アイゼンハワー共和党政権の援助政策が冷戦外交の観点から失敗であったとして、開発援助政策を自らの外交政策の中心の一つに据えていく [Taffet 2007: 25]。「進歩のための同盟」がそうした構想の中心であり、選挙戦終盤の1960年10月18日のフロリダ州タンパにおけるラテンアメリカ政策に関する主要演説で同政策の骨子を示した [Schlesinger 1963: 194-95]<sup>1)</sup>。

レイブによれば、ケネディは、キューバ革命によってラテンアメリカが米ソ冷戦における主戦場の一つになったと考えており、米国にとって「世界で最も危険な地域」だと繰り返し述べるなど、「第2のキューバ」の出現を防ぐという「絶対的な決意」の下にラテンアメリカで冷戦を闘い勝利するこ

1) 演説内容については、<http://www.presidency.ucsb.edu/ws/?pid=74098> を参照（2017年2月11日にアクセス）。

とが新大統領にとっての重大な関心事となった<sup>2)</sup>。ケネディは、ラテンアメリカを含む第三世界で冷戦に勝利するためには経済援助の拡大が不可欠だと考えていたが、そのためには途上国に対して民主的で進歩的かつ反共的な社会の建設を促さなければならないと確信していた [Taffet 2007: 25; Rabe 1999: 19, 34]。ケネディと彼のアドバイザーらは、第三世界の中でラテンアメリカはアメリカの援助と改革支援に最も適した地域と考えており、東南アジアやアフリカ等の他の途上地域と比べて、ブラジル、アルゼンチン等の南米の大国やメキシコのような地域の先進的諸国においては産業化の進展や中間層の拡大が見られ、国民の間に民主化への期待も高く、ロストウの言う「離陸」の直前にあるとして、大規模な援助計画の対象として最も望ましい地域と見なされていた [Gordon 1988: 74-75; Latham 2000: 80]。前稿で検討した「進歩のための同盟」という新たな政策は、こうした観点から生み出されたのであった [上村 2017: 34-35]。

但し、この点に関して、「ベスト・アンド・ブライテスト」と称されたケネディ政権首脳らは、ジェローム・レビンソンとファン・デオニスの指摘にもあるように、ベトナム介入の場合と同様に自らの能力とアメリカの富や力、技術への過信があり、数世紀にわたって形成されてきたラテンアメリカの伝統的社会構造の変革の可能性を楽観視し過ぎていたことは否めない。ケネディは演説の中で、「平和的な革命を不可能にする者は、暴力的な革命を不可避にしてしまう」と述べたが、これは、改革によって自らの地位を脅かされるラテンアメリカの伝統的支配層への警告であり、ケネディ政権の首脳らはキューバ革命と同じ事態を避けるためにラテンアメリカのエリート層は米国の期待する改革政策に協力せざるを得ないと考えていた。またキューバやソ連の支援する左派からの挑戦に対しては、国内治安対策の強化で十分対応できると自信を持っていた [Levinson and de Onis 1970: 7; Halberstam 1972: 50-56]。

ケネディ政権は、ボリビアに対する援助もこうした観点から見直しを行い、アイゼンハワー政権末期に戻すばかりになっていた経済援助を大幅に拡大し、開発援助の強化が図られ、それまでタブーであった国有化鉱山への援助資金の投入も開始する<sup>3)</sup>。新政権にとって、多くの開発途上国で「今後繰り返されるであろう革命を [既に] 経験」していたボリビアは、MNR 政権が「反共主義の観点から最も害の少ない選択肢」という従来の後ろ向きの評価に代わって、「進歩のための同盟」がめざしたラテンアメリカ社会の改革モデルの一つとして積極的に評価し直されたのである [Letter from Bowles to President Kennedy, July 6, 1961, Bolivia: General, 1961, Countries Series, Box 10, NSF Files, John F. Kennedy Library (以下 JFKL); Malloy 1970: 291]。別稿でも検討したように、アイゼンハワー政権の中にもミルトン・アイゼンハワーやキャボット国務次官補等のボリビアの MNR 政

2) リチャード・リーブスによれば、ケネディは、実際にはベルリンが第三次世界大戦を巻き起こす恐れがある最も危険な場所と考えていた [Reeves 1993: 68]。

3) 経済援助の額は、アイゼンハワー政権末期の 1957 年から 1961 年までの年平均 2270 万ドルから 1962 年から 64 年には年平均 4250 万ドルへと倍増する [Thorn 1970: 195]。ボリビアとの関係で、ケネディ新政権の援助政策によって特に大きな変化をもたらされたのが、産業等の国有化を推進する途上国への援助や国有化産業への公的資金の投入であった。セオドア・ソレンセンによれば、こうした援助に関しては、ラテンアメリカに対するものだけでなくインドやアフリカ等についても自由主義経済の原則に反するものとして議会を中心に強い批判が見られた。ケネディは、冷戦の文脈でソ連との援助競争を重視する一方、途上国の自立志向や非同盟志向を必然的なものとみなしており、中立主義を「非道徳的」と非難した前政権のダレス国務長官とは異なって、対米関係全体の中で許容できる範囲で民族主義的な政策や中立主義的政策を評価するという「洗練されたアプローチ」をとっていたとされる [Sorensen 1965: 537-40]。

権を始めとする改革主義政権への支援を強く主張する指導者はいたが、ダレス国務長官やハンフリー財務長官に見られるようにボリビア革命政権の国家主導型経済政策への不信感は強く、共産主義の差し迫った脅威への対応の範囲内で必要な援助を行うというのがボリビア革命に対する基本的なスタンスであった [上村 2015b: 19-22; 上村 2017: 30-31]。

それに対して、ケネディ政権首脳は、近代化論の観点からラテンアメリカにおける本格的な社会改革を前向きにとらえ、大規模な経済援助によって積極的に支援しようとしたのである。言い換えれば、ボリビアは、1961年のケネディ新政権の発足とともにアメリカ政府にとって、「国境の南にある問題に満ちた困難な国」から「進歩のための同盟によって求められた社会革命の先駆者」へと「殆ど一夜にして変貌を遂げた」のであった [Thorn 1970: 194, 198]。世界銀行での途上国への融資担当官をへて、1956年までラパスの米国援助ミッションで経済顧問を務めたコーネリアス・ゾンドグによれば、「ボリビアの1952年の革命の文脈からすれば [進歩のための]同盟は後から遅れてやってきた」のであり、ボリビア革命は、ラテンアメリカ諸国で1950年代末から高まりを見せた「貧困と圧制に対する民衆の反乱」としての「政治的・社会的革命」が、ボリビアのように「民族主義的」だが「民主主義的」な枠組みによって実現できるのか、それとも「[キューバのように]全体主義的」なものになってしまうのか、という点に関する「実験場」になっていると捉えられたのである [Zondag 1966: 3-4]。

まさにこうした意識は当時政権内でも共有されており、ケネディ大統領自身もパス大統領率いるボリビア革命政権に対して強い関心と共感を持つようになり、「進歩のための同盟」政策が目指した社会改革を既に10年近くわたって続けてきたパスのような民族主義的だがプラグマティックな改革指導者に対して強い敬意を持つに至る<sup>4)</sup>。ケネディは、1960年11月の大統領当選後ただちに当面の重点項目の一つであるラテンアメリカ政策に対応するため「ラテンアメリカの当面の問題に関するタスクフォース」を設置して「進歩のための同盟」政策の策定をめざすが、これと並行してボリビアに対しても新たな援助政策の立案が進められることになる<sup>5)</sup>。

新大統領がボリビア革命に対する強い関心を持つようになった重要な契機の一つと考えられるのが、アーサー・シュレジンガーによって政権初期に提出された大統領宛の一連の中南米視察報告である。著名な歴史家でもあるシュレジンガーは、「バスト・アンド・ブライテスト」の一員としてハー

4) ケネディは、1961年6月22日のパス大統領宛の書簡の中で、「貴国が現在経験している困難に立ち向かう閣下の勇気と先見の明に対する私の深い敬意」という表現を用いている [Letter from President Kennedy to President Paz, June 22, 1961, USDS, *Bulletin*, August 7, 1961: 251-2]。フィールドによれば、ケネディは、パスに対して、共に「近代化を推進」する「同じ者同士」という意識があったとしている [Field 2014: 7]。同様の点に関しては、[Lehman 1999: 134] も参照。

5) ラテンアメリカ・タスクフォースは、フランクリン・ローズヴェルト政権で米州担当国務次官補 (1938～44年) を務めたアドルフ・パーリが座長となり、他のメンバーには「進歩のための同盟」開始後はそのコーディネーターとなるテオドロ・モスコソ、研究者としてはラトガース大学のロバート・アレクサンダー、ペンシルバニア大学のアーサー・ウィットテーカー、その後ブラジル大使に任命されるハーバード大学のリンカン・ゴードン等のそうそうたるメンバーがそろっていた [FRUS, 1961-1963, XII: 1]。その中でアレクサンダーは、1958年にボリビア革命に関する最初の本格的な研究書を著しており、ボリビアでの改革の動きを強い共感をもって描いていた [Alexander 1958]。タスクフォースの議論の中で、アレクサンダーがボリビア革命の経験を「進歩のための同盟」政策の中に活かそうとしただけでなく、ボリビア革命政権への支援強化に関しても前向きな姿勢を示したことは容易に想像できよう。

バード大学から大統領特別補佐官としてホワイトハウス入りし、セオドア・ソレンセン報道官やスピーチライターのリチャード・グッドウィンらとともにケネディにとってリベラル派の主要なアドバイザーの一人としての役割を果たし、しばしばケネディ自身の要請によってラテンアメリカを含む様々な問題に関してアドホックな形で政策策定に関与した [*Finding Aid: The NSC Files, 1961-1963*, JFKL: 6]<sup>6)</sup>。シュレジンガーは、1961年2月12日から3月3日にかけて新設の「平和のための食糧」局のジョージ・マクガバン局長の中南米6か国の視察旅行に同行し、その間2月22日から3日間ボリビアに滞在し、パス大統領とも面会した [*U.S. Department of State, Foreign Relations of the United States (以下 FRUS), 1961-1963, XII: 10*]。まずはシュレジンガーが訪問した時点のボリビアの状況について確認しておこう。

## 6. 1961年のボリビアの状況とパスの「東側外交」

ボリビアでは、1960年8月に再び大統領職に復帰したパスの下で経済発展戦略の強化が目指されていたが、1956年から続く経済安定化政策による緊縮政策の余波によって経済の停滞が続いていた。これにアイゼンハワー政権末期の経済援助の減少が重なり、経済的困難が深刻化していた。更に2月20日からの大規模な教員ストの混乱の中でパス大統領は、シュレジンガー到着の前日の21日に戒厳令を施行しており、2月末には鉱山公社 (COMIBOL) と石油公社 (YPFB) の給与支払いを控えて資金不足から米政府に緊急援助を求めている [*Telegram (以下 Tel) 453 from La Paz (以下 LP) to Secretary of State (以下 SS), February 24, 1961, U.S. National Archives, Records of the Department of State, RG56 (以下 NA), 724.5NSP/2-2461*]。また左派労働指導者ファン・レチンがパスの副大統領に就任したことで政権内での左派の影響力が拡大することや、キューバ革命の影響によってボリビア国内で左派勢力の活動が活性化することがアメリカ政府内で懸念されていた [*Despatch (以下 Desp) 212 from LP to Department of State (以下 DS): "Weeka No. 42," October 18, 1960, NA724.00(W)/10-1860*]<sup>7)</sup>。

更にそうしたボリビアに対して、キューバ革命政権との関係強化を進め、ラテンアメリカへの更なる進出の機会を伺うソ連は攻勢を強め、1960年末に外交関係の樹立を条件に錫精錬施設の建設や石油掘削設備の供給、道路や鉄道建設のための資金提供、そのための技術者の派遣等の総額1億5000万ドルに上る大規模な経済援助を申し出ており、ボリビア国内では東側陣営との経済提携の強化を求める声が左派を中心に高まっていた [*Editorial Note, FRUS, 1958-1960, V: 654; Lehman*

6) ケネディ政権の政策決定の特徴として、アイゼンハワー前政権が軍の参謀会議を模してNSCの正式な会合を重視したのに対して、こうした官僚機構を通じた公式の政策決定プロセス以外のインフォーマルな協議等を重視した点が指摘される。これは、長い会議で既に知っていることを繰り返し聞かされることを嫌うケネディのスタイルも反映しており、問題ごとに短期的に設けられるタスクフォースが多用されるとともに、シュレジンガー等の大統領特別補佐官等も一種の無任所大臣として活用された [*Reeves 1993: 68; Finding Aid, The NSC Files, 1961-1963, JFKL: 5*]。

7) ラパスの米大使館はボリビア国内でのキューバの動きや労働運動等におけるキューバ支持の動向に注意を払っていたが、特にボリビア労働運動の全国的統一組織である「ボリビア労働中央 (COB)」でキューバ支持の動きが強く、米側は警戒していた [*Desp 381 from LP to DS: "Joint Weeka No. 4," January 24, 1961, NA724.00(W)/1-2461*]。

1999: 133-134; Field 2014: 11-12<sup>8)</sup>。こうしたソ連援助に関してパス大統領は、1961年1月初めに具体的なプロジェクトをあげて受け入れに前向きの姿勢を示していた。パスは、COMIBOL再生のための支援として米国・西独・米州開発銀行（IBD）との協議が進んでいる「西側」のトライアングラー計画による援助には、COMIBOLの動力関係の支援が含まれていないため、水力発電プラント設備の供給をソ連側に期待すると述べていた [Desp 372 from LP to DS: “Joint Weeka No. 3,” January 17, 1961, NA724.00(W)/1-1761]。その後、パスは、1月18日の数千人の鉱山労働者を前にした演説では、更に踏み込んで、経済発展と経済的自立の達成のために「モスクワにもワシントンにも服属することはせず」、「ロシアからであろうがアメリカからであろうが、両陣営のどちらにせよ資本 [原文のまま] を獲得する可能性があるのなら、獲得しなくてはならない」と述べた [Desp 381 from LP to DS: “Joint Weeka No. 4,” January 24, 1961]。

このようにパスは、ソ連からの援助の申し出をアメリカへの圧力としても巧みに利用しており、ソ連の援助がアメリカからの援助に代わりうるものなのか、またケネディ新政権の援助政策が実際にどのようなものになるのかを瀬踏みしながら、米ソ両陣営からの援助を天秤にかける形で慎重に対応していた。そして、1952年の鉱山国有化の際と同じように、詳細な調査を理由にして結論を引き延ばして時間を稼ぐという常套手段を用いて、ソ連援助問題をめぐる国内、特に左派からの圧力をしのいでいた [Dunkerley 1984: 106; Siekmeier 2011: 80, 97-98]。最終的には、パスはケネディ政権の下で対外援助政策を活性化させていくアメリカおよび西側との関係強化の道を選択するが、ケネス・リーマンによれば、これまでのアメリカ一辺倒に代ってソ連からの援助のオプションが現実味を帯びてきた1961年初めの時点においては、パスは、経済援助とそれに伴う非同盟・中立外交をめぐる国内的議論の高まりをむしろアメリカにとってのボリビアの価値を高まるための「絶好の機会」と捉え、対米外交に利用しようとしたのである [Lehman 1999: 134]。

## 7. シュレジンガー報告（1961年3月）

こうした状況の中でボリビアを訪問したシュレジンガーは、視察旅行全体に関する報告と大統領宛の覚書において「今回の視察で真の緊急性が唯一認められたのはボリビアであった」と述べ、新大統領にボリビアへの注意を喚起する [Memorandum (以下 Memo) from Schlesinger to the President, March 4, 1961, Bolivia: March 1961–October 1961, Box WH-23, Schlesinger Papers, JFKL; Memo from the President’s Special Assistant (Schlesinger) to President Kennedy, March 10, 1961, *FRUS, 1961–1963*, XII: 10–18]。特に重要なのは、「ボリビアにおける危機」と題された3月3日付の大統領宛覚書であり、ケネディ大統領に南米の小国ボリビアが新政権の看板政策である「進歩のための同盟」にとって持つ重要性を恐らく最初に認識させたものとしての意味を持つといえよう。また民主党新政権のリベラル派の立場からのアイゼンハワー共和党政権のボリビア援助政策に対す

8) ケネディ政権成立の2日後の1961年1月22日にはチェコスロバキアからジリ・ハジェク外務副大臣一行がボリビアを訪問し、文化交流協定に調印した。米大使館は、文化協定はソ連陣営のボリビアへの「政治的浸透」を促進することになると懸念を示していた [Desp 381 from LP to DS: “Joint Weeka No. 4,” January 24, 1961]。

る批判を極めて集約的に示しているとも考えられるので、以下やや詳しく引用する<sup>9)</sup>。

シュレジンガーは、「ボリビアは少なくとも1943年から慢性的に軽度の危機が続いてきたが、今や深刻な政治的激動の淵にあると信じるに足る十分な根拠がある。そうした激動は共産主義者による政権奪取をもたらすかもしれない」と冒頭から警告する。シュレジンガーによれば、ボリビアの「危機」は「風土病のようなもの」であり、キューバやブラジル、ベネズエラといった国々がより大きな注目を浴びてしまうこともあって、ワシントンで本格的な検討がなされてこなかったが、今こそ政府のトップレベルでの緊急の検討が必要であるとされる。シュレジンガーは、ボリビアの危機の原因は経済的な停滞、そして過去2年間の共産主義勢力の活性化と政権への浸透にあるが、前者の経済停滞の原因の一つはIMFに引きずられて経済発展ではなく経済安定化を目指してきた従来のアメリカの政策にもあるとして、アイゼンハワー政権を批判する。そこにソ連とキューバが付け込もうとしており、「ボリビアの混乱をレチンとソ連にいっせ任せたまえ」という空気さえ國務省内にはあるようだが、キューバの後に別の共産国がラテンアメリカに出現することは到底容認できない。なぜなら「ボリビアの喪失は破局的であり、ボリビアが今後どうなるかは、他のアンデス諸国が非共産主義的の革命の道を選ぶか、それとも共産主義的の革命を目指すのかを左右する」ことにもなりうるからだとして、自由主義的・民主主義的・平和的「革命」の推進を目指す「進歩のための同盟」政策への致命的なダメージが強調される。更にシュレジンガーは、南米大陸の中央に位置するボリビアが共産化すれば、近隣のペルー、エクアドル、ブラジル、チリ、パラグアイに対する転覆工作や革命の拠点となる可能性があり、米国内でも政治的な批判が高まり、議会で「ボリビアを失った責任は誰にあるのか」という演説が聞こえてくるのは容易に想像できようと述べ、ケネディの痛いところを巧みについている [Memo for the President: "The Crisis in Bolivia," March 4, 1961, Bolivia: March 1961–October 1961, Box WH-23, Schlesinger Papers, JFKL]。

シュレジンガーは、対応策として新政権のラテンアメリカ政策の根本的見直しの方向に沿った形で、政策の重点を経済安定化から経済発展へと移すことを提案し、経済援助の大幅増額を示唆する。シュレジンガーによれば、アイゼンハワー政権8年間にボリビア革命政権に対しては、ラテンアメリカに対する経済援助としては一人当たりにして最も多く、総額で1億5千万ドルの贈与と3千万ドルの信用供与がなされてきたが、そのかなりの部分がボリビア政府の財政赤字の補填に費やされ、目立った効果をあげていない。ボリビアの財政規模は年間約3500万ドルにすぎず、「カリフォルニア大学やアメリカの中規模都市の財政規模より小さい」のであり、ボリビアの経済発展に必要な金額は、「我が国の安全保障にそれほど必要不可欠でもないアジア諸国につき込まれてきた金額と比較すれば大した額」ではなく、総額で1億2500万ドルから1億5千万ドルほどもあれば、鉱山と鉄道の近代化、交通網の整備、高地からより肥沃な低地帯への農民の移動等の経済発展に必要な資金を賄える。しっかりした経済発展の計画策定とパス政権にその計画を確実に履行させるための「主要な政治的・外交的努力」が不可欠であり、そのためには開発経済の専門家による調査団の迅速な派遣とボリビア政府に計画を実行させることのできる「巧妙かつ精力的な大使」の任命が必要だとしている [Memo for the President: "The Crisis in Bolivia," March 3, 1961]。

こうしたボリビアの危機的状況については、実はボリビア駐在のカール・ストローム大使が既に

9) ボリビア革命に対してケネディがいつどのようにして強い関心を抱くようになったのかについては、それを示す明確な資料は存在しない。研究者の中では唯一ジェームズ・シークマイヤーがこの点に関してシュレジンガー報告の重要性を指摘している [Siekmeier 2011: 96]。

2月24日の国務長官宛の公電の中で強く警告していた。しかし、大使の報告は、国務省内でボリビア問題を長年担当してきた国務省担当者や経済安定化政策開始以降のボリビア国内の混乱への対応に追われてきた大使館関係者、更には高齢の大使自身の「ボリビア疲れ」とも言うべき空気がにじみ出たものであった。ストロームによれば、現在のボリビアの窮状と援助要請に関して、「ボリビア側の自助努力がないまま救済を続ける」ことの是非という対ボリビア援助の根幹にかかわる問題について、政権のトップレベルでの検討が必要だが、ボリビア政府はチェコスロバキア政府による信用供与の申し出を含めて東側の援助に飛びつく可能性が大きい。もし「そうした事態が避けがたいのであれば、東側にボリビアの開発への協力というプロバガンダ面の勝利をもたらすことにはなるかもしれないが、その場合でも東側の援助が[米国がこれまでの援助を通じて行ってきた]国内負債の支払いといった非生産的な目的にも使われることが望ましい」と述べ、諦めとも投げやりともつかない悲観的な見通しを示していた[Tel 453 from LP to DS, February 24, 1961, NA724.5NSP/2-2461]。

こうした悲観論や無力感は、対外政策に革新をもたらそうとする意欲と自信に溢れ、「ニューフロンティア」を標榜する新政権の中枢には無縁であり、シュレジンガーは、このストロームの公電にも言及しながら大使が警告した同じ状況に対して正反対の楽観的な見通しと処方箋を示したのである。このように共産主義の脅威を強調する一方で、経済発展を通じたりベラルな対応を唱えるシュレジンガーの議論は、ケネディにとって効果的であったはずである<sup>10)</sup>。そもそもケネディは、1960年の大統領選挙戦において焦点の一つとなったキューバ問題に関して反カストロの強硬姿勢でアイゼンハワー政権と対立候補であるニクソン副大統領の「弱腰」を批判し、反カストロ勢力への「強力な」支援を訴えていた[Wyden 1979: 65-67; Higgins 1987: 58-61]。更にリチャード・リープスによれば、ケネディは決断力とともに慎重さを兼ね備えた政治家であったものの、共産主義の問題で「ソフト」と呼ばれることを嫌い、ピッグス湾事件に関しても最後まで成功に確信が持てないまま、強硬策に引きずられてしまった[Reeves 1993: 19, 69-73]。シュレジンガーが、トルーマン民主党政権が議会共和党保守派から「中国の喪失」の責任を厳しく追及されたことを念頭に置いていたのは明らかであり、ケネディもそのことをよく理解していたはずである。シュレジンガーの覚書は、ケネディ自身と新政権の中枢にボリビア問題の重要性を強く印象付けたと考えられ、ケネディはそ

10) ケネディは物事の理解が早く、速読の名手としても知られていた。リープスによれば、このことは、逆に言えば特定の問題に対する関心が長く続かないことも意味していたとされる[Reeves 1993: 53]。シュレジンガーは、大統領宛のものとしては比較的長い7頁に及ぶ覚書でボリビア援助問題での迅速な対応の必要性を訴えたが、アメリカの大学や都市との財政規模の比較等の具体的な対比や数字を織り交ぜながら、共産主義の脅威や進歩のための同盟にとっての重要性を巧みに訴えており、ケネディは、その後のボリビア問題に対する迅速な対応からすれば、この覚書を実際に読んで問題の意味をよく理解してその後の政策を打ち出し、ボリビア革命とその指導者パスへの関心を深めていったと考えられる。ちなみにケネディ自身も歴史への関心が強いことは周知の事実であるが、新大統領は政権発足当初から自らの政権の歴史が書かれることを想定して記録の保持に気を配った。冷戦りベラルの代表的知識人の一人で「著名な歴史家」のシュレジンガーを政権に招くにあたって、ケネディはシュレジンガーがケネディ政権に関する「本格的な著作」を書くことを期待しており、後者の助言に従って重要な問題に関しては「記憶が確かなうちに」当事者が記録を書き留めるという手続きを確立した[Sorensen 1965: 5]。シュレジンガーの1965年の大部のケネディ政権論は、(そしてソレンセンの同年の著作も)こうした背景の中で書かれている。いずれにせよケネディは、個人的には最も親密なアドバイザーではなかったものの、シュレジンガーを重用し、そのアドバイスには一目置いていたはずである。

の後、シュレジンガー報告に沿った形で直ちにボリビアに対してアマースト大学の開発経済学者ウィラード・ソープを団長として、新設の国際開発庁（AID）の専門家等も含む本格的な経済使節団の派遣を発表するとともに、新ボリビア駐在大使についても人選を促し、5月には労働経済の専門家で若く活力に溢れ、経済援助と社会改革を組み合わせた新政権の政策を強く支持するリベラル派外交官であるベンジャミン・ステファンスキーを抜擢して大使に任命する [Lehman 1999: 136; Field 2014: 8]<sup>11)</sup>。

## 8. ソープ経済使節団（1961年3月）

ソープ使節団は、ケネディ政権が「進歩のための同盟」政策の一環としてラテンアメリカに対して最初に派遣した大統領経済調査団であり、3月8日から12日間ボリビアに滞在し、ボリビア政府やアメリカ大使館関係者だけでなく、国連、IMF、IBD等の国際機関関係者、更には現地の企業関係者、労働指導者、農民代表等から幅広く意見を聞き、ボリビアに対するアメリカの援助政策・経済政策の「現状と効果」について集中的な調査を行った。調査団は、今後の見通しと取るべき政策に関する86ページにわたる詳細な報告書を短期間で仕上げ、48項目に及ぶ具体的な提言を示した<sup>12)</sup>。報告書は3月24日に大統領に提出されるが、その内容は基本的にシュレジンガーの報告を経済の専門家が肉付けと権威づけをしたものともいえ、その後パス政権に対する援助政策が迅速に進められていく基礎となる。

ソープ使節団報告書は、まず「従来報告されてきた経済的・政治的危機」について実際に確認したとして、主要産業である錫産業を始めとする生産の低下、所得の継続的減少と高い失業率、政府や国有化鉱山等での給与の不払いや遅れ、生活必需品の入手困難、それらに伴うストライキの頻発等によって「既に深刻な経済状況は更に悪化を続けている」と指摘する [Memo for the President, March 24, 1961; “Report to the President,” March 24, 1961: 1-2, 23-32]。そうした経済的問題に加え、報告書は、政府内での「レチン主義者」らの左派勢力・共産主義勢力の影響力拡大やその危険性といった政治的問題についても詳しく検討し、左派への政治的「譲歩」は経済的な困難に起因しており、経済状況の改善なしには左派に対して効果的な対応ができない、というパス政権の主張は額面通り受け取ることは慎重であるべきだが、現在の経済の極度の沈滞と政治的な混乱が続けば、パス政権がレチンないし他の左派勢力にとってかわられる可能性が高いと警告する。報告書が特に重視していたのはやはり経済状況の改善であった。仮に従来の規模で経済安定化に重点を置いた援助を続

11) ステファンスキーについて詳しくは、[Eric Page, “Ben S. Stephansky, 85, Dies; Former Ambassador to Bolivia,” April 19, 1999, *New York Times*] を参照。ソレンセンは、自らの著作の中で、ケネディ政権は、大使人事に関して、従来「準備不足の政治任命者や想像力に欠けたキャリア外交官」が任命されてきたのに対して、新政権による「現地の言語や文化、問題等について訓練を受けた人々の任命の記録的な多さ」を強調しているが、その中で駐日大使に任命されたエドウィン・ライシャワーらと並べる形で、「若く有能なキャリア外交官」の一人としてステファンスキーのボリビア大使への任命を指摘している [Sorensen 1965: 279]。

12) 大統領宛の3月24日付の覚書と報告書自体については、[Memo for the President from Willard L. Thorp, Jack C. Corbett, and Seymour J. Rubin, March 24, 1961; “Report to the President by the Special Mission to Bolivia,” March 24, 1961, Bolivia: Security, Report on Economic Policy, 24 March 1961, Countries Box 112, President’s Offices Files (以下POF), JFKL] を参照。

けたとしても将来の展望はなく、ボリビアを現在の経済的・政治的苦境から救い出すためには、「経済発展の包括的な計画に基づいて新鮮で精力的なアプローチ」を取ることが不可欠だとして、必ずしも経済援助の大幅拡大を提唱したわけではないが、ボリビア政府による効果的な経済計画の迅速な策定を強力に後押しし、その行動計画に沿って援助資金を適切に供給していくべきだとしている[“Report to the President,” March 24, 1961: 1, 3-17]。

調査団が当面の最重要の課題と見なしたのが、政府にとって大きな財政的負担となっている COMIBOL の経営効率化であった。報告書は、経営権の確立と労働者に対する管理の強化および使節団が 4000 人から 5000 人と見積もる余剰人員の削減を提唱し、前任のシレス政権が経済安定化政策の中に盛り込みながら労働側の「聖域」として結局踏み込めなかったこの問題への本格的な取り組みを促している。この点に関しては、次に触れるトライアングラー計画の準備が既に大詰めを迎えており、報告書は、西独政府とドイツ企業の参加による国有化鉱山の効率化計画に大きな期待を表明している[“Report to the President,” March 24, 1961: 45-50]。

ボリビア革命政権への支援が持つ意味について、ソープ使節団は、かつてボリビア革命政権への緊急援助計画を最初に提唱した 1953 年 4 月の国務省覚書で提起され、その後ミルトン・アイゼンハワーらに支持されながらもアイゼンハワー政権においては重視されることのなかったテーマに再び脚光をあて、以下のように強調する<sup>13)</sup>。

MNR が開始した革命は、様々な問題点があるによせ、[ソ連やキューバ等の外部の共産主義勢力によってもたらされたものではない]純正なもので国民的なものである。MNR 革命は、農地改革や鉱山業の一部の国有化、そして(たとえ選挙において MNR が圧倒的に有利であるにせよ [括弧内は原文])投票権と市民権の拡大といった課題を重視してきた。こうした点からすれば、ボリビア革命は、ラテンアメリカにおけるカストロ主義に対抗するものであり、対抗しうる。1952 年以来アメリカが行ってきた援助は、我々はラテンアメリカの反動的政府を支援することにのみ関心があるといったプロパガンダに対する最も有効な反論となる。もし新たなアプローチと修正された援助計画がボリビアを国民的な健全さと成長に導くことになるとすれば、ボリビア革命と米国によるその支援は、ラテンアメリカに対して [進歩のための同盟の]最も有効な事例となるであろう。もしボリビアがカストロの道に向かえば、アメリカが [ただ]一つの国に [さえ]恩恵をもたらすことができない例として南北アメリカにおいて喧伝されることになろう。新たな援助プログラムを策定し実行することに伴う障害や困難は確かに大きなものがあるが、今闘いをやめてしまったり、輝かしいフェニックスが灰の中からなんとか舞い上がるのを期待して混沌の道を選んだりすることは、賢明な選択とは言えない[“Report to the President,” March 24, 1961: 21-22]。

報告書のこの部分からは、ボリビア革命に関する認識が、キューバ革命とケネディ新政権の成立を経て、「民族主義的・民主主義的」改革のモデルへと大きく変化し、そうした革命政権を後押しすることが新政権にとっての基本的な課題となったことが改めて見て取れる。報告書は、更に「アメリカの撤退は悲劇的な結末を招き、ボリビア以外でも深刻な結果をもたらす」と改めて警告し、ボリビアに対する「成長と発展をめざした包括的援助」の推進が我が国にとって「最善の希望」であると強調する一方、それが「勝ち目の少ないギャンブル」かもしれないことも認めている。しかし、状況は「絶望的」ではなく、「現在の短期的危機をボリビアが乗り越えることができれば、長期的に

13) この点に関しては、[上村 2015a: 17-18; 上村 2015b: 19-22; 上村 2017: 30-31] を参照。

は明るい未来が期待できる」として、何よりボリビアがよい方向に向かい、「離陸」を達成するための「よりよい機会は 2 度と訪れないだろう」と締めくくられている [“Report to the President by the Special Mission to Bolivia,” March 24, 1961: 1-2]<sup>14)</sup>。

## 9. トライアンギュラー計画

この間、米政府、西独政府、ボリビア政府と IBD の間で国有化鉱山の経営再建のためのトライアンギュラー計画の準備が着々と進められていた。トライアンギュラー計画は、もともとボリビア政府が西独のエンジニアリング企業ザルツギッター社に COMIBOL の経営改善策の調査を依頼したことから始まる。西独の企業にそうした依頼がなされたのは、バス政権で新たに COMIBOL 総裁に就任したギジェルモ・ベドレガルが西独で教育を受けたことが一つの契機となっている [Field 2014: 202]<sup>15)</sup>。前稿でも触れたように、ボリビアの外貨の最大の稼ぎ手である国有化鉱山が巨額の赤字を続けて政府の財政にとって深刻な負担となっていただけでなく、予算不足から設備維持のための投資さえできず、鉱山業の持続的な発展が難しい状況が続いていた [上村 2017: 33]。国有化鉱山は、リチャード・ソーンによれば、1952 年の革命開始と国有化の時点で既に「最良の状態になかった」ものが、「9 年間の不十分なメンテナンス」が原因で「崩壊の淵にあった」ために、トライアンギュラー計画の最初の重点は、ザルツギッター社の調査に従って必要な資材や設備等の確保によって施設面で健全な操業が可能な状態を回復することにあった [Thorn 1970: 192-194]<sup>16)</sup>。そのために必要な資金として、まず米政府から 350 万ドル、西独政府と米州開発銀行 (IBD) からそれぞれ同額の 350 万ドルの借款が提供され、その後 3 年間で総額 3750 万ドルの資金が低利の借款の形でこの 3

14) ここでロストウらの唱えた近代化論とそれに基づく対外援助政策のキーワードである「離陸」が用いられていることから分かるように、報告書は近代化論的アプローチに基づいて書かれており、こうした考え方が発足早々のケネディ政権においても対外政策の基本的認識枠組みとして定着していたことが伺われる。更に新政権は、「進歩のための同盟」政策の実施過程において、近代化論が想定しているとする 4 つの発展段階にラテンアメリカ諸国をあてはめ、それぞれの国にあった適切な援助を検討しようとする試みも行っている [“Highlights of the First Meeting of the Working Group on Problems of the Alliance for Progress,” January 6, 1962, *FRUS, 1961-1963*, XII: 75]。キンパー・ピアースによれば、ロストウが *The Stages of Economic Growth* を出版した 1960 年までには近代化論とロストウのアプローチは、ワシントンで「ロストウ・ドクトリン」として経済発展分析の基本的な分析枠組みとなっていた。なおロストウ自身は、経済成長の段階を 5 つに分けていた [Pearce 2001: 76; Rostow 1960]。

15) フィールドは、ケネディ政権が国際収支問題への懸念から貿易黒字を拡大していた西独の貢献に期待していた点も指摘している [Field 2014: 202]。フランク・コスティリオリによれば、ケネディ大統領とロストウ補佐官は、アメリカの「壮大な第三世界 [開発] 計画」にとって西独の国際収支の黒字が「銀行」の役目を果たすと考えていたと、ジョージ・ポール国務次官が証言している [Costigliola 1989: 36]。

16) 既に触れたように、ボリビアの中央政府の直接の財政規模は、3500 万ドルほどであるが、1961 年の時点で COMIBOL の支出額は 6300 万ドルと政府財政の 2 倍もの規模があり、赤字額は 600 万ドル (1960 年の数字) に上っており、政府が国家予算の中から赤字を補填する一方、これによって生じた政府財政の赤字は、アメリカの援助によって補填されるという構造になっていた。COMIBOL は、更に国内業者を中心に取引相手への 500 万ドルほどの負債と鉱山労働者への 50 万ドル余りの給与の未払いがあり、後者は、鉱山労働者によるストライキの頻発や政治的不安定の要因となっていた [Thorn 1970: 192-194]。

者からボリビア政府に提供される計画であった [“Report to the President,” March 24, 1961: 45-46]<sup>17)</sup>。

この中で注目すべき点の一つは、IBDの役割である。1960年に設立されたばかりのIBDにとって、ボリビア鉱山問題は最初の重要な開発案件の一つであり、IBD初代総裁フェリペ・エレラはCOMIBOL問題に精力的に取り組んだ。エレラは、シュレジンガーとソープ調査団の訪問に挟まれる形で1961年3月1日から5日間ボリビアを訪問し、ベドレガル総裁らボリビア政府関係者と協議し、COMIBOLにおける「厳格な労働改革」を条件にIBDからの資金提供に同意する。国有化鉱山は、1952年の鉱山国有化以来、経営の重要決定への労働参加を認める「労働者による管理 (control obrero)」の下で「余剰」労働者の解雇は経営側の判断だけではできず、労働者側の同意が必要であった。フィールドによれば、トライアングュラー計画をめぐるその後の協議の中で、米政府、西独政府、IBDの3者とも「COMIBOLが抱える諸問題は、武装した労組に全面的に責任がある」という点で一致していたが、その中でも特にIBDが余剰労働者の解雇や労働者に対する管理の強化を最も強く主張していた。IBDは、こうした政策を実現するために「労働者による管理」制度の廃止を融資の条件としていたが、この点について当初は米政府も「非現実的」と懸念していた [Field 2014: 20]。こうしたIBDの役割は、1950年代後半の経済安定化計画において、米政府ではなくIMFが前面に出て批判の矢面に立ったことを彷彿させる。この点に関して米政府やIBDの意図をそれぞれの資料等で確認することは困難だが、トライアングュラー計画においては、IBDが強硬に労働者の解雇や管理強化を主張することで批判の前面に出るといった構図が繰り返されていたとも言えよう [上村 2016b: 18]。この時点では、「労働者による管理」の廃止は、直接の前提条件とはならず融資は一応認められ、米・西独両政府およびIBDとボリビア政府の間の交渉が妥結し、トライアングュラー計画は1961年5月半ばに正式に発足することになる [Field 2014: 15, 20]<sup>18)</sup>。

パス政権は、念願の新たな開発援助が認められたことに伴い、米・西独・IBDとの合意に従って国有化鉱山の労働者や国内の左派への締め付けを強める。1961年6月7日には「共産主義者による陰謀」が発覚したとして、一旦解除されていた戒厳令を再び90日間の期限で布告し、共産党系を中心に鉱山労働組合指導者と共産党 (PCB) 指導者の大量検挙に踏み切り、キューバ代理大使には

---

17) 米政府は、1961年3月24日にトライアングュラー計画の米国負担分の最初の資金援助として、主にCOMIBOLの緊急を要する機械・設備の購入に充てる目的のため、ボリビア政府と350万ドルの借款合意の締結を発表したが、これは既に1960年11月にボリビア政府と基本合意していた1000万ドルのCOMIBOL復興資金援助の一部であり、米側が迅速な資金供与によってトライアングュラー計画の執行に本格的に乗り出したことを示していた [“Bolivia Receives \$3.5 Million ICA Loan,” March 24, 1961, *DS Bulletin*, April 24, 1961: 531; “U.S. and Bolivia To Cooperate on Long-Range Development Program,” May 14, 1961, *DS Bulletin*, June 12, 1961: 921]。

18) 但し、当時公表されなかった付属文書において、戒厳令の鉱山地帯への適用、「労働者による管理」の大幅縮減、鉱山労働者の20%削減（およそ5000人）、共産党指導者の労組指導部からの排除等の条件が示され、パス政権に履行が求められていた [Field 2014: 21]。「労働者による管理」自体は、パス政権と左派鉱山労働組合との対立が深刻化する中で、1963年8月3日の大統領令で正式に廃止され、当然ながら労働側の更なる反発を招くことになる [Dunkerley 1984: 111]。

国内政治への介入を理由に国外退去を求めた<sup>19)</sup>。パス政権は、トライアングュラー計画が順調に開始され、ケネディ政権からの経済援助および軍事援助が本格化する中で、国内の左派および鉱山労組への締め付けを強化するとともに、大規模援助の可能性を模索してきた東側陣営への接近にも終止符を打ち、左傾化を強めるキューバとの関係も大きく見直したのである [Dunkerley 84: 109; Lehman 99, 134-136; Field 2014: 21-23]<sup>20)</sup>。

こうした党外左派に対する強硬策が可能であった一つの重要な要因は、レチン副大統領とその配下にある鉱山労働組合連合 (FSTMB) の支持が確保できたことである。パスは、新たなボリビア援助計画およびトライアングュラー計画についてケネディ新政権と協議を続ける中で、左派労働指導者であるレチン副大統領への米側の懸念を和らげるため、海外への視察旅行から帰国途上のレチンを1961年4月にワシントンに立ち寄せ、米政府関係者にレチンの口から直接トライアングュラー計画への支持を表明させている。ジェームズ・ダンカレーによれば、レチンは、ワシントンでの会合を終えて帰国後、「トライアングュラー計画が実現したのは自分の力だ」と公言し、5月7日のFSTMBの総会で「鉱山業の刷新のための唯一の方法である」として同計画への賛成を表明し、同連合の委員長としての権限と「鉱山労働者の最高指導者」としての権威を背景に、共産党系の左派労組からの強い反対を乗り越えて代議員の過半数の支持を取り付けることに成功する [Dunkerley

19) ケネス・リーマンによれば、この「共産党の陰謀」はパス政権による捏造であり、かつて1941年に対米協力を進める寡頭政権によってMNRが「ナチス・ドイツの手先」として非難され、パス自らが弾圧された故事にならない、今度はパス自身が弾圧する側に回って、トライアングュラー計画と対米協力を推進したとされる [Lehman 1999: 135-136]。

20) パスの強硬策への傾斜は、シレス前政権との比較で興味深い点がある。シレスも共産党系を中心に鉱山労組の武力を伴った経済安定化政策への反対が次第に強まる中で、1950年代末に向けてアメリカからの治安対策援助を受け入れ、労働者への軍事的な対応に次第に傾いていくが、1956年の同政策導入直後の時点では国内での広範なデモや暴動等の反対運動に関して、米側が軍の投入による軍事的対応を期待していたのに反して、「革命の同志に銃を向けることはできない」と、辛抱強く政治的な解決を模索するなど、トライアングュラー計画への反対に強権的手段をとったパスとは対照的ともいえる対応を示した。但し、シレスは必ずしもそうした「民主的な」手法によって労働左派の説得に成功したわけではなく、既に触れたように主要な鉱山では左派労組による「自主管理」状態が続き、経済安定化は当初の計画通りには行われず、ボリビア経済も沈滞を続けた [上村 2016b: 22-23]。その後、1964年の軍事クーデタによるパス政権の崩壊後、ボリビアは、他のラテンアメリカ諸国の多くと同様に長い「独裁政権の時代」を経験する。その後、1982年にシレスが民主化移行期の最初の大統領として政権に復帰するが、この時も合意を重んじるシレスの「民主的」な統治によっては、軍事政権崩壊後の政治的・経済的混乱を收拾できず、1985年からパスが再度大統領職に復帰して、IMFの強力な指導下に1950年代をはるかに上回る徹底した経済安定化政策を実施し、極度のインフレを克服していく。1980年代のシレス政権 (1982-1985年) に関しては、[Malloy and Gamara 1988: 157-200] を参照。シレス・パス両政権 (1982-1989年) については、[Dunkerley 2007: 106-186] を参照。1980年代のボリビアを含めた第三世界全体に対する経済安定化政策（「構造調整」と呼ばれた）をめぐる政治に関する総合的な分析に関しては、[Haggard and Kaufman 1992] を参照。

1984: 105; Lehman 1999: 135; Field 2014: 20<sup>21)</sup>。自らをパスの後継者として 1964 年に次期大統領就任の野心を持つレチンは、MNR 左派指導者として労働側の要求実現を政府にぶつけて傘下の鉱山労働者たちをまとめていく一方で、パスには貸しを作りつつ米国との関係にも配慮するという難しいバランスの維持を 1952 年革命の開始以来続けてきたとも言えるが、今回も一旦はそうした離れ業に成功したのである<sup>22)</sup>。パス政権による党外左派に対する強硬策が可能になったもう一つの要因としては、次に検討する米国による軍事援助の強化がある。

## 10. トライアングラー計画とアメリカの軍事援助

MNR 革命政権に対する米国の直接の軍事援助は、別稿でも触れたように、経済安定化政策への反対等のためにボリビア国内の政治情勢の不安定が続く中で、1958 年に大統領警護大隊の装備と訓練およびボリビア陸軍の 2 か所の訓練センター用の装備を贈う目的でシレス政権に対する 41 万ドルほどの少額の贈与によって開始されていた [上村 2016b: 27-28]<sup>23)</sup>。パス大統領は、経済成長路線を強力に推進するためには政治的安定と政府の治安維持能力の向上が不可欠だと考え、シレス政権末期以来の国軍の再建と米国との軍事協力を積極的に推し進める。パスは、トライアングラー計画の開始に先立つ 1961 年の 2 月 9 日にケネディ新政権との間で 100 万ドル相当の軍事物資、装備品、役務の提供に関する軍事援助協定を締結しているが、その主要な目的の一つが国内治安対策であった。更に 4 月半ばにはラテンアメリカを統括する米国カリブ軍司令部 (Caribbean Command) のアンドリュー・オミエラ司令官一行がラパスを訪れ、治安対策援助についてボリビア側と協議している [Tel 430 from LP to SS, February 9, 1961, NA 611.247/2-961; Lehman 1999: 150-151; Field 2014: 15]<sup>24)</sup>。こうした一連の動きは、トライアングラー計画等の経済発展計画の一環として国有化鉱山での人員削減等の「経営健全化」に伴って予想される労働者側の強い反発に備える

21) 但し、大統領使節として「進歩のための同盟」政策に関する協議のため、1961 年 6 月 4 日から 22 日まで南米 10 か国を訪問したアデライ・スティーブソン国連大使は、国務省の『ブルティン』で公開された視察報告の中で、6 月 12 日から 2 日間訪問したボリビアに関して「緊急で危険な状況にある」との認識を示し、その原因として「共産主義者の鉱山労働者や学生指導者らに対する [パス大統領の] 強力な反対の姿勢に関して、レチン副大統領が強固な支持を表明するのをためらっている」ためだと指摘している。パス大統領は、「小さな軍隊が支えている」が、鉱山労働者や農民の民兵を「武装解除」して経済発展のための十分な安定が確保できるかは不透明だとしている [Adlai Stevenson, "Problems Facing the Alliance for Progress in the Americas," *DS Bulletin*, July 24, 1961: 140]。

22) その後、トライアングラー計画の秘密合意の実施によって労働者への圧力が強まる中で、レチンは、そうした「過酷な条件」については知らされていなかったと、1950 年代後半の経済安定化政策の時と同じ正当化をすることになる [Field 2014: 21; 上村 2016b: 23-24]。

23) 詳しくは、[DS Instruction A-131 from DS to LP: "Military Assistance Agreement with Bolivia," March 6, 1958, NA724.5-MSP-1258] を参照。

24) 「カリブ軍司令部 (Caribbean Command)」は、その後 1963 年の軍改組によって「南方軍司令部 (Southern Command)」に改名される [http://www.southcom.mil/About/History/: 2017 年 2 月 28 日アクセス]。米側の軍事使節はこの頃頻繁にボリビアを訪問しており、カリブ軍のセオドア・ボガート少将一行が 1961 年 1 月 15 日にラパスを訪問して周辺のボリビア軍施設を視察し、2 月の軍事協定の下準備を行っていた [Desp 372 from LP to DS: "Joint Weeka No. 3," January 17, 1961, NA724.00(W)/1-1761]。

ためでもあった。

実際，1961年の時点でボリビア正規軍の兵力が7,500名にとどまっていたのに対して，MNR系と党外左派を合わせた労働者民兵とインディオ農民民兵の総数は16,000名に上っており，MNR政権のコントロールの及ばない非MNR民兵組織に対抗するため，国軍の強化はパス政権にとって急務であった。特に鉱山労働者の民兵組織は，装備は概ねライフル銃とダイナマイトで作った手製の手榴弾という具合に貧弱ではあったが，よく組織・訓練されて準軍事組織としては最も強力であり，鉱山等を拠点とする共産党系の民兵組織は革命政権にとって脅威であった [Dunkerley 1984: 114; Field 2014: 25-26]。中でも最大のシグロ・ベインテ鉱山は政府与党のMNR系ではなく共産党系の指導者の下で武装した労働者による「自主管理」状態になっており，アメリカ側も深刻な懸念を持っていた [上村 2017: 33; Malloy 1970: 177-178; Dunkerley 1984: 62-63; Field 2014: 19, 25]。パス政権は，自らの経済発展計画を実現するため，またトライアングラー計画によって米・西独・IBDから要請されている鉱山運営の「合理化」を進めるためにも「労働者による管理」に本格的に手を付ける必要があった。

上記の2月9日の軍事援助協定のもう一つの柱が「シビック・アクション」計画の推進であった。これは，ボリビア軍部が1950年代後半から再建されていく中で，「革命のための軍隊」として再編成され，経済発展に軍を活用して道路建設，国内植民のための農地開発，遠隔地との航空輸送，学校の建設，識字キャンペーン，医療奉仕等の社会的貢献を行って長年にわたる国民の軍への不信の払拭を目指すものであった。ボリビアにおけるこうした軍の「平和的役割」は，ケネディ政権の「進歩のための同盟」のイメージとも合致するもので，1960年代を通じてボリビアへの軍事援助が増大する中で積極的に活用された [Tel 430 from LP to Secretary of State, February 9, 1961, NA 611.247/2-961; Lehman 1999: 150-151]。

こうしてパス政権末期の1964年までには軍事援助も年間150万ドルに増額され，兵士の数も15000名へと増強されていくが，その過程で国軍に対して「シビック・アクション」ではなく，軍事組織としての充実と「専門化」に重点が置かれていく。米軍によってパナマ運河地帯に設置された「米州陸軍学校 (U.S. Army School of the Americas: SOA)」に多数のボリビア軍の将兵が派遣されて訓練を重ねただけでなく，ノースカロライナ州にあるフォート・ブラッグ基地の「米陸軍特種戦学校 (U.S. Army Special Warfare School)」にも多くの将兵がボリビアから派遣され，訓練を受けた。ちなみに1963年の時点でラテンアメリカ諸国の中で最も多くの将兵が同特種戦学校に派遣されていたのがボリビアであった [Dunkerley 1984: 114; John 2009: 175]。まさにこのような米軍による集中的な軍事教育と訓練によって，他の多くのラテンアメリカ諸国と同様に，1964年のクーデタ以降のボリビア軍政を支える「専門的」な将校団が形成される。更にボリビアの場合，1967年にチェ・ゲバラのゲリラ部隊を効果的に追い詰めることになる国内治安部隊もこの過程で形成されるのである<sup>25)</sup>。

## 11. ケネディ政権の対応

ケネディ政権は，こうしたボリビア政府側の対応を高く評価し，パス政権に対する梃子入れを強

25) SOAについては，[Gill 2004]を参照。

めていく。新政権が首脳レベルでボリビア革命に対する強い支持の姿勢を公式に示したのが、1961年5月14日のケネディ大統領からパス大統領への公開書簡である。ケネディは、書簡の中で「進歩のための同盟」の基本的狙いを繰り返す形で、「よりよい生活と更なる社会的公正の実現を希求するボリビア国民」の期待に応えるためには「貴国の経済成長を急速に促進」し、「国民の生活水準の向上」を図らなければならないと述べ、トライアングュラー計画を含むボリビア援助計画について詳しく説明した。ケネディは、「進歩のための同盟の完全なパートナー」としてボリビアに期待すると述べ、「ボリビア経済の長期にわたる組織的な発展」のための支援を約束し、国連や米州経済社会理事会等の国際機関とも協力しながらボリビアの長期的経済発展計画策定のために協力し、そうした計画の遂行を確実にするためにケネディの名代として「経済問題特別代表」の派遣を提案している<sup>26)</sup>。ケネディは、米国がボリビアの経済発展にとって重要な各種プロジェクトにすぐに取りかかる用意があるとして、既に具体的検討に入っている一連の事業の中で、「進歩のための同盟」の中でも強調されている労働者と農民向けの低コスト住宅の提供等の焦眉の課題に関して具体的計画ができ次第直ちに取りかかるべきだと述べる。更にトライアングュラー計画を含む一連の大規模援助計画について触れ、COMIBOLに対する最初の援助資金である350万ドルの借款に加え、ボリビア石油公社(YPF)に対する資材・設備購入のための600万ドルの借款、新たな国内移住を促進するための道路建設用に200万ドル、学校での昼食の提供と家族支援のための「平和のための食糧」計画から135万ドル分の余剰農産物の供与等と具体的にあげている。これらの援助に加えて、米国が既に約束している援助、そして西独政府およびIBDからの借款等によって、5,000万ドル余りの「自由世界からの」開発援助がボリビアに対して約束されており、米国は、ボリビアとその国民が「力強く、繁栄した国として運命づけられた未来に向かっていくことへの手助けを始めることができる」として、「今後、他国がたどるべき道を切り拓いた偉大な革命」との協力で強い期待を表明した[Letter from President Kennedy to President Paz, May 14, 1961, DS *Bulletin*, June 12, 1961: 920-921]。

このケネディの書簡で注目すべきは、一つは、トライアングュラー計画への西独の参加もあって、「自由世界からの援助」ということが強調されている点である。ケネディは、国連や他の国際機関の貢献についても詳しく触れており、こうした多国間援助の強調はアイゼンハワー政権期の対ボリビア援助をめぐる言説とは趣が異なっている。もう一つ注目される点は、COMIBOLとYPFBに対する米政府ローンに言及していることであり、国有化産業への政府援助に対する禁忌が払拭されたことを大統領レベルで明確に確認したと言える。ケネディ政権は、更にボリビアの経済・社会的発展の促進に向けて、平和部隊の派遣も含めた総合的な支援政策を展開していく<sup>27)</sup>。

ケネディ政権によるこうした一連のボリビア援助に関する迅速な対応は、パス政権が春以降に

26) その後、経済問題特別代表の人選は難航した。チェスター・ボウルズ國務次官は、9名に就任を要請してことごとく断られたが、「有能な人物をこの任務につけることはこの上なく緊急を要するというあなた[ケネディ大統領]の意見に同感」であるとして辛抱強く人選を続け、ようやくバージニア大学の開発経済学者のローランド・エッガーの就任が決まった [Letter from Bowles to President Kennedy, July 6, 1961, Bolivia General, 1961, Box 10, Country, NSF, JFKL]。エッガーは、1961年8月14日から11月までボリビアに滞在し、パス政権の取り組みを高く評価する報告を滞在中の1961年10月から何度かにわたって大統領に提出している [“Interim Report by Rowland Egger to President Kennedy,” October 5, 1961, Bolivia General, 1961, Box 10, Country, NSF, JFKL; Field 2014: 41]。

27) 平和部隊の第一陣は1962年に到着し、その無私の働きぶりはボリビアでも注目を集めるが、ジョンソン政権に交代直後の1963年末には左派の支配するシグロ・ベインテ鉱山で米人人質事件が発生し、平和部隊のボランティアも巻き込まれることになる [Field 2014: 109-117]。

とった諸措置に応える意味もあった。国務省は、ボリビア援助政策に関する民主党下院議員からの問い合わせに対する 1961 年 6 月 22 日の返信の中で、以下のように説明している。

ボリビア政府は、過去 1 か月間に左傾化への漂流を止め、左派志向の労働勢力に対する権威を回復するための積極的な措置を取り始めています。政府は、1961 年 6 月 8 日に戒厳令を布告し、ボリビア政府に対する陰謀と自由世界によるボリビア援助計画への妨害の証拠があるとして、35 人余りの共産主義者および親カストロの労働運動指導者の逮捕に踏み切りました。果たしてパス大統領がこうした措置の実施を続けるに十分な力を持っているのか、それとも政策を撤回して MNR 左派に譲歩してしまうのか、今後の展開を待たなければなりません [Letter to Representative Thomas Morris, June 22, 1961, NA611.24/6-2261]。

国務省は、このようにパス政権の取り組みを評価しながらも、いまだ完全な信頼を置くには至っていない。一方、新任のステファンスキー大使は、着任すると直ちにパス大統領、レチン副大統領、ベドレガル COMIBOL 総裁、その他の政府指導者や関係者との精力的な会談をこなして情報収集に努め、7 月 13 日の国務長官宛の電報でボリビアの状況に関する大使としての最初の包括的報告を行っている。その内容は、左派に対するパス政権の取り組みに関しては、上記の 6 月 22 日の国務省の書簡とほぼ同じ評価をしている。大使は、共産主義者の取り締まりは、「本来望ましいほど徹底したものではなかった」として、逮捕を逃れて地下に潜った共産主義者も多く、MNR 党と政府内の共産主義者には逮捕の手が及んでいないだけでなく、共産党の機関紙『エル・プエブロ』は発刊を続け、追放されたキューバの代理大使に代わって新たな代理大使も着任していると報告している。但し、今回の「極左」の取り締まりは、1952 年にボリビア革命が開始されてから初めてのことであり、逮捕者の釈放を求める鉱山労働者や大学生によるストライキの動きに対しても、パス大統領は、釈放要求に断固屈することなく、ストライキの終結に成功していると評価している [Tel 13 from Stephansky to SS: "Current Situation since Arrival," July 13, 1961, NA724.00/7-1361]。ケネディ政権の開発援助政策と国内治安対策援助をめぐるボリビア国内の対立が本格化し始めたのである。その後、パス政権と左派鉱山労働者との対立は深まり、それに学生や都市労働者、インディオ農民組織、右派政治勢力、そして復活した軍部が加わってボリビアの政情は混迷を深め、ケネディ政権も厳しい対応を迫られていく。1963 年 11 月のケネディ暗殺までのその詳細については次号において検討する。

#### 〈文献リスト〉

##### I. 一次資料

##### 【英文】

Andrade, Victor, 1976 *My Missions for Revolutionary Bolivia, 1944-1962*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Dwight D. Eisenhower Library (DDEL と略), Ann Whitman File (AW と略).

Eisenhower, Milton, 1963 *The Wine Is Bitter: The United States and Latin America*, Garden City, NY: Doubleday.

Ferrell, Robert H., ed., 1981 *Eisenhower Diaries*, New York: W. W. Norton.

John F. Kennedy Library (JFKL と略), National Security Files (NSF と略).

U.S. National Archives, Records of the Department of State, RG56 (NA と略).

U.S. Department of State, 1983 *Foreign Relations of the United States, 1952-1954*, Volume IV: *The American Republics* Washington: Government Printing Office (FRUS, 1952-54, IV と略).

U.S. Department of State, 1987 *Foreign Relations of the United States, 1955-1957*, Volume VII: *The American Republics*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1955-57, VII と略).

U.S. Department of State, 1991 *Foreign Relations of the United States, 1958-1960*, Volume V: *The American Republics*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1958-60, V と略).

U.S. Department of State, 1991 *Foreign Relations of the United States, 1958-1960*, Volume V: *The American Republics, Microfiche Supplement*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1958-60, V, *Microfiche Supplement* と略).

U.S. Department of State, 1996 *Foreign Relations of the United States, 1961-1963*, Volume XII: *The American Republics*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1961-63, XII と略).

#### 【スペイン語】

Bolivia, Ministerio de Relaciones Exteriores y Culto, Recuerdo, Archivo Central (BMREC と略).

Bolivia, Ministerio de Relaciones Exteriores y Culto, 1953 "Plan de diversificación de la producción," *Boletín*, 26-27 (enero-diciembre 1953): 140-67.

Guevara Arze, Walter, 1955 *Plan inmediato de política económica del gobierno de la revolución nacional*, La Paz: Bolivia, Ministerio de Relaciones Exteriores y Culto, 1955).

Paz Estenssoro, Victor, 1955 *Discursos parlamentarios*, La Paz: Editorial Canata.

#### 【インタビュー】

Bennett, W. Tapley, Jr. in Washington, D.C. on December 15, 1989

Guevara Arze, Walter, in La Paz on January 23, 1990.

Holt, Pat, in Bethesda, Maryland on November 7, 1989.

Woodward, Robert, in Washington, D.C. on October 10, 1989.

## II. 二次資料

### 【英文】

Alexander, Robert J., 1958 *The Bolivian National Revolution*, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Benjamin, Jules R., 1990 *The United States and the Origins of the Cuban Revolution: An Empire of Liberty in an Age of National Liberation*, Princeton, NJ: Princeton University Press.

Blasier, Cole, 1976 *The Hovering Giant: U.S. Responses to Revolutionary Change in Latin America*, Pittsburgh: University of Pittsburgh.

Blasier, Cole, 1983 *The Giant's Rival: The USSR in Latin America*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Blasier, Cole, 1993 "The End of the Soviet-Cuban Partnership," in Carmelo Mesa-Lago, ed., *Cuba After the Cold War*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press: 59-97.

Brands, Hal, 2010 *Latin America's Cold War*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Clawson, Robert W., ed., 1986 *East-West Rivalry in the Third World: Security Issues and Regional Perspectives*, Wilmington, DE: Scholarly Resources Inc.

Conaghan, Catherine M., and James M. Malloy, 1994 *Unsettling Statecraft: Democracy and Neoliberalism in the Central Andes*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Costigliola, Frank, 1989 "The Pursuit of Atlantic Community: Nuclear Arms, Dollars, and Berlin," in Patterson, ed., *Kennedy's Quest for Victory*: 24-56.

Dawely, Alan, 1991 *Struggles for Justice: Social Responsibility and the Liberal State*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Dozer, Donald M., 1959 *Are We Good Neighbors?: Three Decades of Inter-American Relations*, Gainesville, FL: University

- of Florida Press.
- Dunkerley, James, 1984 *Rebellion in the Veins: Political Struggle in Bolivia, 1952-1982*, London: Verso.
- Dunkerley, James, 2007 *Bolivia: Revolution and the Power of History in the Present*, London: Institute for the Study of the Americas.
- Eder, George Jackson, 1968 *Inflation and Development in Latin America: A Case History of Inflation and Stabilization in Bolivia*, Ann Arbor, MI: Graduate School of Business Administration, University of Michigan.
- Fine, Sidney, 1964 *Laissez Faire and the General-Welfare State*, Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.
- Field, Thomas C., Jr., 2014 *From Development to Dictatorship: Bolivia and the Alliance for Progress in the Kennedy Era*, Ithaca: Cornell University Press.
- Foxley, Alejandro, 1983 *Latin American Experiments in Neoconservative Economics*, Berkeley: University of California Press.
- Gill, Lesley, 2004 *The School of the Americas: Military Training and Political Violence in the Americas*, Durham: Duke University Press.
- Gonzalez, Edward, 1987 "Cuba, the Third World, and the Soviet Union," in Andrzej Korbonski and Francis Fukuyama, eds., *The Soviet Union and the Third World: The Last Three Decades*, Ithaca: Cornell University Press: 123-147.
- Gordon, Lincoln, 1963 *A New Deal for Latin America: The Alliance for Progress*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Haggard, Stephan, and Robert R. Kaufman, eds., 1992 *The Politics of Economic Adjustment; International Constraints, Distributive Conflicts, and the State*, Princeton: Princeton University Press.
- Halberstam, David, 1972 *The Best and the Brightest*, New York: Random House.
- Haslam, Jonathan, 2011 *Russia's Cold War: From the October Revolution to the Fall of the Wall*, New Haven: Yale University Press.
- Higgins, Trumbull, 1987 *The Perfect Failure: Kennedy, Eisenhower, and the CIA at the Bay of Pigs*, New York: W.W. Norton.
- Horowitz, Irving L., 1988 *Cuban Communism*, 6th ed., New Brunswick, NJ: Transaction Books.
- Immerman, Richard, 1982 *The CIA in Guatemala: The Foreign Policy of Intervention*, Austin: University of Texas Press.
- John, S. Sandor, 2009 *Bolivia's Radical Tradition: Permanent Revolution in the Andes*, Tucson: University of Arizona Press.
- Kahler, Miles, 1992 "The United States and the International Monetary Fund: Declining Influence or Declining Interest?" in Margaret P. Karns and Karen A. Mingst, eds., *The United States and Multilateral Institutions: Patterns of Changing Instrumentality and Influence*, London: Routledge: 91-114.
- Kaufmann, Burton I., 1978 "The United States Response to the Soviet Economic Offensive of the 1950s," *Diplomatic History* 2-2 (1978): 153-65.
- Kaufman, Burton I., 1982 *Trade and Aid: Eisenhower's Foreign Economic Policy, 1953-1961*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Klein, Herbert S., 1969 *Parties and Political Change in Bolivia, 1880-1952*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Klein, Herbert S., 1982 *Bolivia: The Evolution of a Multi-Ethnic Society*, New York: Oxford University Press.
- Klein, Herbert S., 2003 *A Concise History of Bolivia*, New York: Cambridge University Press.
- Kolko, Gabriel, 1988 *Confronting the Third World: United States Foreign Policy, 1945-1980*, New York: Pantheon.
- Korbonski, Andrzej, and Francis Fukuyama, eds., 1987 *The Soviet Union and the Third World: The Last Three Decades*, Ithaca: Cornell University Press.
- Krasner, Stephen D., 1985 *Structural Conflict: The Third World Against Global Liberalism*, Berkeley: University of California Press.
- Latham, Michael, 1998 "Ideology, Social Science, and Destiny: Modernization and the Kennedy-Era Alliance for

- Progress," *Diplomatic History* 22-2 (Spring 1998): 199-229.
- Latham, Michael, 2000 *Modernization as Ideology: American Social Science and "Nation Building" in the Kennedy Era*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Latham, Michael, 2011 *The Right Kind of Revolution: Modernization, Development and U.S. Foreign Policy from the Cold War to the Present*, Ithaca: Cornell University Press.
- Lehman, Kenneth Duane, 1999 *Bolivia and the United States: A Limited Partnership*, Athens, GA: University of Georgia Press.
- Levinson, Jerome, and Juan de Onis, 1970 *The Alliance That Lost Its Way: A Critical Report on the Alliance for Progress*, Chicago: Quadrangle Books.
- Malloy, James, 1970 *Bolivia: The Uncompleted Revolution*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Malloy, James, and Eduardo Gamara, 1988 *Revolution and Reaction: Bolivia 1964-1985*, New Brunswick, NJ: Transaction Books.
- McMahon, Robert J., 2014 *The Cold War in the Third World*, Oxford: Oxford University Press.
- Mesa-Lago, Carmelo, ed., 1993 *Cuba After the Cold War*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Morley, Morris H., 1987 *Imperial State and Revolution: The United States and Cuba, 1952-1986*, New York: Cambridge University Press.
- Packenham, Robert A., 1973 *Liberal America and the Third World: Political Development Ideas in Foreign Aid and Social Sciences*, Princeton: Princeton University Press.
- Packenham, Robert A., 1988 "Cuba and the USSR since 1959: What Kind of Dependency?" in Louis L. Horowitz, ed., *Cuban Communism*, 6th ed., New Brunswick, NJ: Transaction Books: 109-139.
- Patterson, Thomas G., ed., 1989 *Kennedy's Quest for Victory: American Foreign Policy, 1961-1963*, New York: Oxford University Press.
- Patterson, Thomas G., 1994 *Contesting Castro: The United States and the Triumph of the Cuban Revolution*, New York: Oxford University Press.
- Pearce, Kimber C., 2001 *Rostow, Kennedy, and the Rhetoric of Foreign Aid*, East Lansing, MI: Michigan State University Press.
- Rabe, Stephen, 1988 *Eisenhower and Latin America: The Foreign Policy of Anticommunism*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Rabe, Stephen, 1989 "Controlling Revolutions: Latin America, the Alliance for Progress, and Cold War Anti-Communism," in Patterson, ed., *Kennedy's Quest for Victory*: 105-122.
- Rabe, Stephen, 1995 "Eisenhower Revisionism: The Scholarly Debate," in Michael J. Hogan, ed., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941*, New York: Cambridge University Press: 300-325.
- Rabe, Stephen, 1999 *The Most Dangerous Are in the World; John F. Kennedy Confronts Communist Revolution in Latin America*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Rabe, Stephen, 2014 "Cold War Presidents: Dwight D. Eisenhower, John F. Kennedy, Lyndon Baines Johnson, and Richard M. Nixon," in Frank Costigliola and Michael J. Hogan, eds., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941*, 2nd ed., New York: Cambridge University Press: 131-166.
- Rostow, W. W., 1960 *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Scheman, L. Ronald, ed., 1988 *The Alliance for Progress: A Retrospective*, New York: Praeger.
- Schlesinger, Arthur M., Jr. 1963 *A Thousand Days: John F. Kennedy in the White House*, Boston: Houghton Mifflin Company.
- Schlesinger, Stephen, and Stephen Kinzer 1982 *Bitter Fruit: The Untold Story of the American Coup in Guatemala*, Garden City, NY: Doubleday.

- Siekmeier, James F., 1999 *Aid, Nationalism and Inter-American Relations, Guatemala, Bolivia and the United States 1945-1961*, Lewiston, NY: Edwin Mellen Press.
- Siekmeier, James F., 2011 *The Bolivian Revolution and the United States, 1952 to the Present*, University Park, PA: Penn State University Press.
- Sigmund, Paul E., 1980 *Multinationals in Latin America: The Politics of Nationalization*, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Smith, Peter, 1996 *Talons of the Eagle: Dynamics of U.S.-Latin American Relations*, New York: Oxford University Press.
- Smith, Robert F., 1960 *The United States and Cuba: Business and Diplomacy, 1917-1960*, New York: Bookman Associates.
- Smith, Tony, 1994 *America's Mission: The United States and the Worldwide Struggle for Democracy in the Twentieth Century*, Princeton: Princeton University Press.
- Smith, Wayne, 1987 *The Closest of Enemies: A Personal and Diplomatic Account of U.S.-Cuban Relations Since 1957*, New York: W. W. Norton.
- Szulc, Tad, 1986 *Fidel: A Critical Portrait*, New York: Avon Books.
- Taffet, Jeffrey, 2007 *Foreign Aid as Foreign Policy: The Alliance for Progress in Latin America*, New York: Routledge.
- Toranzo Oroca, Carlos, 2008 "Let the Mestizos Stand Up and Be Counted," in John Crabtree and Laurence Whitehead, eds., *Unresolved Tensions: Bolivia Past and Present*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press: 35-50.
- Welch, Richard, 1985 *Response to Revolution: The United States and the Cuban Revolution, 1959-1960*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Westad, Odd Arne, 2007 *The Global Cold War: Third World Interventions and the Making of Our Times*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Whitehead, Laurence, "The Bolivian National Revolution: A Twenty-First Century Perspective," in Merilee Grindle and Pilar Domingo, eds., *Proclaiming Revolution: Bolivia in Comparative Perspective*, Cambridge, MA: Harvard University Press: 25-53.
- Wilkie, James, 1969 *The Bolivian Revolution and U.S. Aid since 1952*, Los Angeles: UCLA Latin American Center.
- Wood, Bryce, 1961 *The Making of the Good Neighbor Policy*, New York: Columbia University Press.
- Wood, Bryce, 1985 *The Dismantling of the Good Neighbor Policy*, Austin: University of Texas Press.
- Wyden, Peter, 1979 *Bay of Pigs: The Untold Story*, New York: Simon & Schuster.
- Young, Kevin, 2013 "Purging the Forces of Darkness: The United States, Monetary Stabilization, and the Containment of the Bolivian Revolution," *Diplomatic History* 37-3 (June 2013): 509-557.
- Zondag, Cornelius, 1966 *The Bolivian Economy, 1952-65: The Revolution and Its Aftermath*, New York: Praeger.
- Zoumaras, Thomas, 1987 "Eisenhower's Foreign Economic Policy: The Case of Latin America," in Richard A. Melanson and David Mayers, eds. *Reevaluating Eisenhower: American Foreign Policy in the Fifties*, Urbana: University of Illinois Press: 155-191.

【邦文】

- 上村直樹 2015a 「アイゼンハワー政権の対ラテンアメリカ援助政策とボリビア革命—MNR 革命政権への初期の対応をめぐって（1953 年 1 月～5 月）」『アカデミア』（社会科学編）第 8 号：1-25.
- 上村直樹 2015b 「アイゼンハワー政権によるボリビア革命政権への援助決定：ミルトン・アイゼンハワーの役割と南米視察旅行（1953 年 6 月～7 月）を中心に」『アカデミア』（社会科学編）第 9 号：1-26.
- 上村直樹 2016a 「アイゼンハワー政権によるボリビア革命政権への長期的援助の決定：米政府内および両国政府間の最後の攻防（1953 年 9 月～1955 年 12 月）」『アカデミア』（社会科学編）第 10 号：25-49.
- 上村直樹 2016b 「アイゼンハワー政権による経済安定化政策とボリビア革命政権：軍再建と軍事援助への道，1956-60 年」『アカデミア』（社会科学編）第 11 号：13-34.
- 上村直樹 2017 「ケネディ政権とボリビア革命：進歩のための同盟の『モデル』としてのボリビア，1961-63 年（上）」『アカデミア』（社会科学編）第 12 号：27-41.

佐々木毅 1993『アメリカの保守とリベラル』講談社.

ヒルズマン, ロジャー 1968『ケネディ外交』(上)・(下) (浅野輔訳) サイマル出版会.

松岡完 2013『ケネディとベトナム戦争—反乱鎮圧戦略の挫折』錦正社.

【スペイン語】

Cajías, Lupe, 1989 *Historia de una leyenda: Vida y palabra de Juan Lechín Oquendo, líder de los mineros bolivianos*, segunda edición, La Paz: Ediciones Gráficas "EG".

Echazu Alvarado, Jorge, 1988 *El militarismo Boliviano*, La Paz: Ediciones Liberación.

Frontaura Argandoña, Manuel 1974 *La Revolución Boliviana (La Revolución Nacional)*, La Paz: Editorial Los Amigos del Libro.

Guzman, Augusto 1981 *Historia de Bolivia*, sexta edición, Cochabamba-La Paz: Editorial Los Amigos del Libro.

Navia Ribera, Carlos 1984 *Los Estados Unidos y la Revolución Nacional: entre el pragmatismo y el sometimiento*, Cochabamba: Centro de Información y Documentación.

## The Kennedy Administration and Bolivia's MNR Revolutionary Government: Bolivia as a “Model” for the Alliance for Progress, 1961-1963 (Part II)

Naoki KAMIMURA

### 要 旨

米国は、米ソ冷戦の文脈の中で、1953年にボリビア革命政権への経済援助を開始し、1964年に革命政権が軍事クーデタによって倒壊するまで大規模な経済援助を続ける。本稿は、米国による革命政権支援という特異な政策の背景とそのアメリカ外交における普遍的意味を解明するための一環として、ケネディ政権に焦点を当てた論考の第2部である。ケネディ政権は、キューバ革命とカストロ政権の対ソ接近の衝撃の中で、「進歩のための同盟」による対ラテンアメリカ援助・改革政策をダイナミックに推進するが、ボリビア革命に関しても同政権が目指す改革モデルの一つと位置づけ直し、改めて大規模な経済援助によってボリビア革命政権の挺入れを図る。本稿は、こうしたケネディ政権による対ボリビア援助政策の立ち上げの時期である1961年を中心にケネディ政権の構想に焦点を当てて検討する。